



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.16

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.16. 実践
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2010

ISSUE DATE:

2010-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147123>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No. 16 2010年2月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市朽木 市場

守山フィールドステーション

中心市街地でソバ栽培3 ー都市農園の試みー 守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

これまで2回にわたって、守山市中心市街地でのソバ栽培の試みについてご紹介してきました。この試みの背景や、過程についてご理解いただけたでしょうか。今回は、このソバ栽培について、地域の人々の関わり方や影響、反響について考えたいと思います。いったい、守山のまちの人々は、このソバ栽培をどう受け止めて下さったのでしょうか。

ソバなんて！

「中心市街地でソバを栽培してみようと思うんです…」と、去年の春、地域の様々な方に提案とお願いをした時の反応は、首をかしげる方が4割、面白い！と言う方が2割、関心のなさそうな方が4割…といったところでした。首をかしげる方のほとんどが「ソバは荒地でつくるもの」という考えをお持ちで、難しいだろう・土が合わないだろう・出来ても不味いだろうという反応でした。しかし、その方々も、面白い！と言われた2割の方の「まあ、とにかくいっぺんやってみたら？」という言葉には賛成してくださって、いざ、実行に移すことになりました。畑、貸してください。

栽培する畑をお借りすることが、一番難しいと考えていました。当初、周囲の反応が必ずしも良いものではなかったもので、貸して下さる土地があるのか本当に心配だったのです。しかし、結果的にはこれが一番スムーズに進みました。スムーズというのは、地域の方が、「うちの親父が花植えてるとこに、ソバ植えたら？」「私の友達が、もう畑使ってないから頼んであげる」と、逆に提案して下さいったことです。3つの畑をお借りすることが出来ました。

畑作り、ソバ作り、そして収穫へ

それでも、ずっと使われず草生す土地を、まず起こさなければならない。大量の枯れ枝、はびこるドクダミ、真夏のカチカチの土。「一人では、絶対無理だ」と本当に頭を痛めたのはこの時です。畑を作る

ことの難しさを、想定していなかったのではなく、甘くみていたのです。ちょっとずつやるしかないなと鍬とスコップを買い揃えたとき、電話がかかってきました。「今日、ちょっと畑の準備しようと思うねんけど、時間あるかいな？」協働しようといって下さっていた「だるまそばの会」の会長さんからの電話でした。すぐに畑に向かうと、耕耘機を積んだ軽トラが停まっていた。放置された枯れ枝を軽トラがいっぱいになるまで積み、土を耕耘機で起こしてもらい、草を取り除きました。畑の持ち主の方の協力もあり、3つの畑を、土が軟らかくなるまでにしてもらいました。また、この企画に賛同してくれた滋賀県立大学の学生や、小学校の先生、農協の職員の方にも、はびこるドクダミを丁寧に取り除き、畝立てをしてもらいました。

どれも炎天下の中での作業で、本当に有難いものでした。また今年は全く雨が降らず水やりの必要がありました。夕方、畑へ行くとすでに土が湿っています。畑の持ち主の方が、「水やりくらいやったら出来るよ」と、水をやっていてくれるのです。

実がついた頃、台風の前日には熟した実を摘んでおいてくれたのも、台風で倒れた株を紐で縛って起こしてくれたのも地域の方々です。畑を通じてかわされる言葉や気持ちや時間が、この試みの醍醐味であり可能性だと感じています。

種、まだあるの？

今回の取り組みを発表する様々な機会の中で、中心市街地の交流館でパネル展示をした際、地元の人が「種、まだあるの？」と尋ねてこられました。花がきれいだから、来年、自宅でも植えてみようと考えておられるようです。また、出来た蕎麦はいつでも食べれるのかという声も多く、少しずつ、地域に浸透し、広まればと願っています。



写真:畑準備中の地域の方

どんぐり苗“奮戦”記 一 椋川から一

結いの里・椋川 是永宙

朽木 FS では一昨年から〈ホトラ山の復元〉に取り組んでいます（ホトラ山については、本ニューズレター2号と4号を参照）。ホトラ山世界は山とのつきあい方の一つの典型であり、これからの〈くらしの森〉づくりを照らしてくれるのではないかと私たちは考えています。

復元作業では、カヤとナラがはびこる原野を再現することを目標としています。カヤもナラももともと野良で生えているものを育てるのだから、難しいだろう……。ところが、じつは甘くない！ カヤ株定植の翌年、株の張りは期待したほど旺盛ではなく、ナラの苗づくりときたらほんとに手数が掛かってしまいました。

まず一昨年初、どんぐりを拾って移植ポットに入れ発芽を待ちました。シカの食害に遭わないようネットで囲まれたところに移して、ひと安心……。2日後、苗床に行くと新芽がない。どうやらカラスにやられてしまったようです。

苗がない。けれども、稔りの秋まで待てない。梅雨どきならば移植のショックが少ないだろうと、春から2ヶ月余りした頃、伸び始めたナラ葉を目当てに山をうろつきまわることになったのです。が、長く伸びた直根を掘り取るのはなかなか手間要りな作業です。そうやって採集した苗をフラワーポットに移す作業でも根は傷むので、根付いたのはおよそ半分。手間の割りに成果乏しく、やはり「どんぐり拾って、取り播き苗」がベストという結論になりました。

苦労もあったのですが、作業を通じて新しいつながりもでき、また発見もありました。二年目のどんぐり拾いはFS関係者の外へも広げてみました。現場の隣はECC学園高校（通信制）です。その環境授業で、山野を荒らすシカの食害について取り上げ、どんぐり拾いを実習としてみました。都市部に住んでいる生徒たちにとって「シカの食害」は縁の遠い話になりがちです。けれども、ナラ林を上り下

りしながら濡れた落ち葉に触り、自分たちの身体をつかって取り組んだことで、実感が湧いたようでした。「あのとき拾ったどんぐりどうなった？」と尋ねてくれる生徒もいます。



写真1: 環境授業でどんぐりを拾う生徒たち

この冬の初め、どんぐりの伏せ込み作業のときには10cm程度の積雪がありました。重機で雪を押し分けて土を掘り返した定植床に、今度は一輪車で腐植土を運搬しました。けれども、雪混じりのゴロ土では一輪車は思うように動きません。ふっと、昔はソリを使って木を出していたことを思い出し、除雪用のスノードンプを持ち込みました。すると、なんと軽々と運べること！雪を使った運材や集材を思い浮かべながら、山里の知恵に感じ入りました。

雪解けの3月にはカラス対策の網とシカ除けのネットを張る作業が待っています。3反程の実験地。その広がりを活かし、〈くらしの森〉のメニューである山菜・低木を少しずつ加えるのが次のステップです。「危機こそチャンス」という言葉があります。もしかすると、シカに痛めつけられた山や野の再生をめざしていく中で、昔の知恵と出会い直し、力をもらう場面があるのかもしれません。



写真2: 運搬作業に除雪用スノードンプを活用

バングラデシュ水運の観光事業化の可能性を探る NPO法人 プロジェクト保津川 豊田知八

大中小規模の河が50河川以上流入している別名「川の国」といわれるバングラデシュでは流域地域間での人や物の運送交通手段は現在も水上航路に高い比率で依存している。

河川形状や規模等は異なるものの、同様の水運業が長く栄えた歴史的背景を持つ京都の保津川を仕事場とし、観光の現場に身を置き、常に観光客のニーズを敏感に読み取る事を求められる者としての視点を頼りに、「バングラデシュの川観光の可能性」を探ってみた。

川と水運視察の対象として、乗船したのは1月19日(火)5キロメートル以上はゆうにあるバングラデシュで最も長いジャムナ橋のかかるタンガイル県のジャムナ川（ブラマプトラ川がバングラデシュに入ると名前が変わる）と21日(木)琵琶湖の数倍の面積が雨季には水没するハオールと呼ばれるキシールガンジー県のニキール郡グルウッラ川の2度である。両河川とも日本で呼ぶ「川」とは河川幅、流量ともその規模が大き

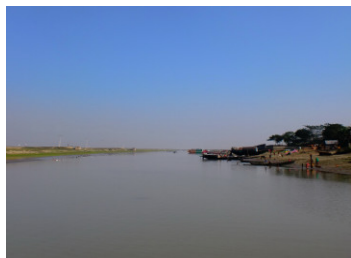


写真1: オールドブラマプトラ川支流の雄大な川風景

く、乾季であってさえも、初めて見る私にとっては、いわゆる「湖」や「海」の形状に通ずる河川風景だ。雨季の姿は想像を絶することだろう。

舟は保津川の観光船と同サイズのものだが、両河川ともに急流部がないため、激しい揺れもなく乗り心地は良好。舟から見渡す、水平線や地平線が空と交わるスケール感は、大陸から流れ込む大河ゆえの雄大な川風景だ。波ひとつない広い水面を、日光が眩しく照りつけ輝く自然現象も、舟の旅情を盛り上げる要素がある。

「観光」という視点では「流域地域の日常の暮らしぶり」も大きな資源といえる。ニキール地域では船着場から両岸約5～6km範囲に渡り集落が点在し、岸には大小さまざまな形をした舟が多数係留され、流域住民の生活に舟が必要不可欠なものである

ことが分かる。

舟の修理や洗濯、行水をする者、魚とりや水鳥の世話をしている子供の姿も多く見受けられ、活気ある明るい住環境風景が広がる。



写真2: 雨季に備える為、乾季での舟の修理は重要な仕事のひとつだ

川上には農作物、砂など物資を運ぶ大型船から人の運搬や漁に使用する中型舟、昔ながらの櫂と舵で進む手漕ぎ舟が多数往来し、水上学校となる舟まである。各用途に応じた舟が行き来する風景に、地域の舟文化が今も息づいている。

川を生活基盤として生きている流域の人々の活気ある暮らしぶりは、日本が高度経済成長後に失った川の風景であり、それが間近に見ることができるのは興味深く貴重なことだ。

バングラデシュの川風景には、洪水氾濫という厳



写真3: 舟は流域住民の貴重な移動手段となっている

しい川環境が形成した雄大な風景とそこで共生してきた人々の営みが息づき、魅力的で豊かな視覚的観光資源に溢れている。

現在、同国が観光政策をどう位置づけているかは把握していないが、今回のようなフィールドワークのスタイルこそ、‘観る’だけでなく‘触れて知り、気づく’というエコ・ツーリズムのスタイルそのものだ実感するものだ。

その上にバングラデシュの人たちのフレンドリーで屈託のない明るい国民性の土台があれば観光振興へのシフトも十分可能だと感じた。

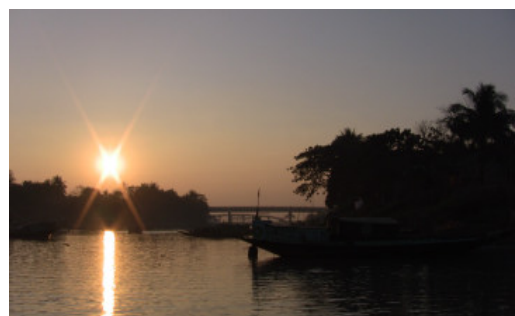


写真4: 夕日が水面に落ち、静かに集落の一日が終わる

■第20回 定例研究会

1. 日時：平成22年2月6日（土）14:00～17:00
2. 場所：京都学園大学 バイオ環境館4F、B4-2教室
3. 発表者：原田早苗（亀岡FS研究員）
発表内容：「したたかさ」というレジティマシー（正統性・正当性）

■第21回 定例研究会

1. 日時：平成22年2月26日（金）16:00～19:00

2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

3. 発表者1：安藤和雄（東南アジア研究所）

発表内容：バングラデシュにおける農村開発フィールドスタディーの社会的ソフトウェア的分析演習

- 発表者2：鈴木玲治（生存基盤科学研究ユニット）

発表内容：地域の将来像をどう描くのか -2年間の活動を振り返って-

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

ラオス活動報告3 タチャンパ村文化資料館建設— 生存基盤科学研究ユニット 矢嶋吉司

2009年6月のラオス国立大学農学部でのプロジェクト開始に向けたワークショップを受け、タチャンパ、ドンバンの2つの村でプロジェクトを実施することが決まりました。ドンバン村には立派な公民館や学校がありますが、タチャンパ村にはこれといった公共施設がありません。両村が位置するサイタニ郡役所は、タチャンパ村での活動をより期待しているようでしたので、タチャンパ村での活動に重点を置くことにしました。

7月、同農学部の担当者と一緒にタチャンパ村を訪れ、古い農具や道具を保存する昔の建物（集落文化資料館）を建てたらどうかと提案しました。村長の家で開かれた話し合いには、村長と副村長2名、村の共産党書記と2名の副書記、村警察の関係者、村の長老など、10名ほどの村役たちが集まりました。村人たちは、農学部の先生の持って行った京都府南丹市美山町北集落のかやぶき民家の写真を見て、「草葺き屋根や棟おさえの木組みがそっくりだ」などと言いながら、今では村にない昔の家について話が盛り上がりました。集落文化資料館(仮称)は、伝統的なデザインで2階建て家屋で、壁と屋根は竹、シロアリの被害を避けるため1階の柱はコンクリート製にするなど建物のデザインや材料が決まり、村が建物の「設計」と「見積もり」をすることになりました。村の小学校の校庭わきにある村の土地に家を建て、1階を村の集会場にしたいという要望も出されました。

8月、村から設計図代わりの家の模型と、工事費の見積もりが農学部に出されました。模型をもとにして、柱や梁、屋根など必要な材料が細かく計算してありました。余談ですが、村人の話では、家を建てる時、模型をつくってから工事を始めるのがふつうだそうです。(写真1)



写真1: タチャンパの村人が作った文化資料館の模型

10月、農学部と村役が打合せを行い、最終的な建設計画が決まりました。①予定より見積もり額が増えたので工事費の不足分をどうするのか、②建てた後の建物の利用方法について、③工事の際の注意事項について、④工事スケジュールなどが話し合われました。

その結果、①見積もり内容を変更し金額を下げるが、建物の質を下げないようにする、そのため、村人ができることは村人がする。それでも不足する分は村で補う。②集落文化資料館、村の集会所、小学校の課外授業などに使う。③十分に乾燥させるため材料を早く手配する、小委員会をつくって仕事の責任を分担する、④農閑期の12月～4月に仕事を完成させる。屋根を完成させてから床と1階の工事を進める、などが決まりました。その場で、材料を集める小委員会、工事を進める小委員会、全体の工事の運営監督する小委員会が組織され、工事を進めることになりました。11月～12月に材料を手配し、本格的な工事の開始は1月からとしました。しかし、サイタニ郡が、2009年12月、ビエンチャンで開催された東南アジア体育大会（SEA ゲーム）のメイン会場となっていたため、警備が厳しく一次仕事がストップし、予定していたより工事が遅れ気味だということです。先日、現場を訪問したところ、あとひと月くらいで完成するだろうと言っていました。

タチャンパ村では、年配の党書記がまとめ役として話を進め、村長が内容を詳細に記録するという連携の良さには感心します。いつも、村役の人が話し合いに出てきます。ほかの村人たちと話す機会がほとんどないので、ほかの村人たちも協力してくれるのだろうか心配になりますが4月のラオスの新年までには、滞りなく工事は終わりそうです。



写真2: 建設中の文化資料館